『ダブリンの市民』の中の作品「姉妹」に見る ジェイムズ・ジョイスの教会批判

James Joyce and his Criticism of the Church in *The Sisters*, a story in *Dubliners*

金　田　法　子
KANADA, Noriko

はじめに

ジェイムズ・ジョイスは20世紀の最も重要な作家の一人と評されるアイルランド出身の小説家である。著名な作品には処女作でもあり短編小説である『ダブリンの市民』、アメリカのランダム・ハウス社が行った「20世紀に英語で著された小説ベスト100」[1]と題した調査で１位となった『ユリシーズ』(*Ulysses*)、同じく３位を獲得した『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*)、そして、新たな言語創造を試みたとされる『フィネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*) の４作を挙げることができる。以下は、ジョイスによって出版された作品の一覧である[2]。

1907年５月（25歳）- 詩集『室内楽』(*Chamber Music*)

1914年６月（32歳）- 短編集『ダブリンの市民』(*Dubliners*)

1916年12月（34歳）- 長編小説『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*)

1918年５月（34歳）- 戯曲『亡命者たち』(*Exiles*)

1922年２月（40歳）- 長編小説『ユリシーズ』(*Ulysses*)

1927年７月（45歳）- 詩集『ポウムズ・ペニイーチ』(*Pomes Penyeach*)

1939年５月（57歳）- 長編小説『フィネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*)

ジョイスは、1882年にアイルランドの首都ダブリンに10人兄弟の長男として生まれた[3]。その後、６歳を過ぎた頃より、イエズス会系のエリート校クロンゴーズ・ウッド・カレッジ（Clongowes Wood College)[4]に入学し、厳格な宗教教育を受けた。ジョイスの父親は市の地方税徴収事務所に勤務していたが組織再編の折に失職する。以降、ジョイス家は僅かな年金収入を頼りとした極めて窮乏した生活を強いられ、彼は９歳の時に退学を余儀なくされる。その後、授業料の安いクリスチャン・ブラザー

1　結城英雄『ジョイスを読む』集英社、2004年、９頁。
　1998年７月20日、アメリカのランダム・ハウス社が実施した調査。

2　桶谷秀昭『ジェイムズ・ジョイス』紀伊国屋書店、1980年、197-205頁。

3　Ellmann, Richard, *James Joyce*, New and Revised Edition, Oxford University Press, 1983, p.21.

4　*Ibid.*, p.29.

ズ・スクール(Christian Brothers' School)[5] に入学するが、11歳の時、名門校ベルベディア・カレッジ(Belvedere College)の学監に就任が予定されていた前学校の校長の計らいで、エリート校である同校への入学が許される。そこでは、ジョイスは特に作文に秀で周囲の注目を集めた。そして、16歳になったある日、聖職への道を勧められるが、彼はこれを拒否し、「司祭とは魂の牢獄と暗黒を意味する。たとえ破滅が待っていようと、芸術と人生に自らの身を委ねよう」[6] と決意する。その後、ジョイスはカトリック系の大学であるユニバーシティー・カレッジ・ダブリン(University College, Dublin)[7] に入学し、英語・フランス語・イタリア語から成る「現代言語」を専攻する。やがて彼は大学を卒業するが、ジョイス家の窮乏には益々拍車がかかり、借金取りに追い立てられ、一家は度重なる引越しに翻弄させられる。しかし、当時、貧困に喘いでいる家庭はジョイス家だけではなかった。

この頃、19世紀後半のアイルランドは未だイギリスの植民地下にあった。その一方で、人々の生活はキリスト教会組織による多大な影響を受けていた。すなわち、人が生を受けた時より、教育、結婚、社会生活、さらには死に至る迄、聖職者の介在なしに生活を営む事は不可能な仕組みが作られていた。しかし、そうした状況にあっても社会は荒ぶ一方であった。ギブソン教授は、「20世紀への変わり目のダブリンの町は、ヨーロッパのどの都市と比べても一番貧困の目立つ都市であった。大飢饉以降、困窮者がダブリンの町に押し寄せ、町はスラムで溢れていた」[8] と記しているが、このような有様はジョイスにとってまさに許しがたく嫌悪すべき状況であった。そして、彼はダブリンを「麻痺」(Paralysis)[9] 状態にあるとし、イギリス政府の無策[10] を非難し、また、市民の窮乏の裏で「蓄財を重ねていたキリスト教会組織」[11] に対する憎悪を深めていった。ある日、ジョイスは滞在先のローマから祖国の弟に宛てて、教会こそが「アイルランドの敵」であるとしたためた書状を送る(the enemy of Ireland)[12]。また、将来の伴侶となる女性に宛てた書状に、「私の心は一切の現在の社会秩序及びキリスト教を拒絶します」(My mind rejects the whole present social order and Christianity)と書き、さらに、「私は書くこと、語ること、行うことによって、それ(教会組織)に公然と戦争を挑みます」(I make an open war upon it by what I write and say and do.)[13] と記した。その後、自ら「自発的亡命」(voluntary exile)[14] と称し、祖国を後にし(22歳)、ユーゴスラビア(現クロアチア)の都市ポーラやイタリアのローマ、オーストリア=ハンガリー帝国領のトリエステ(現イタリア領)、スイスの

---

5 Ellmann, Richard, *James Joyce*, New and Revised Edition, Oxford University Press, 1983, p.35.
6 リチャード.エルマン、宮田恭子訳『ジェイムズ・ジョイス伝1』みすず書房、1996年、62頁。
7 Ellmann, p.57.
8 Gibson, Andrew, *James Joyce*, Reaktion Books Ltd., London, 2006. pp.68-69, ロンドン大学教授。
9 Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed. Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1975, p.83.
10 リチャード・エルマン著、宮田恭子訳『ジョイス伝1』みすず書房、1996年、295頁。
11 同書、294-295頁。
12 Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*., ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1975, p.125.
13 *Ibid*., p.25-26.
14 *Ibid*., p.56.

チューリッヒ、フランスのパリなどを転々とする。その間、彼は主に英語の教師をしながら妻子を養い、その一方で、極貧に苦しみ、持病である眼病と戦いながら執筆活動を続けた。

ジョイスは『ダブリンの市民』執筆にあたり、友人に「多くの人間が、これが都市だと考える、半身不随の麻痺した魂を描くために、あの作品を『ダブリンの市民』と名づける」[15] と1904年７月にしたためているが、その出版は容易ならざるものがあった。彼自身、「この作品は読者の気分を害せずに書くことは出来ない」[16] と述べたが、その言葉は的中し、ジョイスは幾多の出版社と交渉を試みたものの、いずれからも内容の訂正[17]や削除を求められ業を煮やしたジョイスが出版社を契約破棄のかどで提訴することもあった[18]。しかし、そうした紆余曲折を経て執筆から10年以上が経過した1914年６月、『ダブリンの市民』はようやくロンドンの出版社、グラント・リチャーズ社から発行された[19]。

筆者は、ここに「問題の所在」を認める。すなわち、以下の４点である。

【1】 ジョイスは、如何に自身の命題である「教会との戦争」を遂行したか。

【2】 ジョイスが考案した作品構成とは、いかなるものであったか。

【3】 ジョイスは、自ら創造した登場人物たちに如何なるメッセージを託したのか。

【4】 ジョイスの「教会との戦争」は、彼に如何なる帰結をもたらしたのか。[20]

一方、ジョイスは、制度としての、あるいは組織としての、あるいはまた市民を支配するものとしてのキリスト教会を生涯批判の目で見つめていた。彼は、筆者が本稿で分析を試みる『ダブリンの市民』に限らず、それ以降の作品においても、直接的にもあるいは間接的にも教会への批判を展開していた。筆者の研究は、アイルランドのキリスト教会に対しジョイスがどのような感情を抱いていたのか、また、どのような表現方法を用い自らの命題を遂行しようとしていたのかを考察し、さらにジョイスの作品の中に見られる表現からその隠された意図を探り、彼の思想と作品とに架橋を試みようとするものである。その第一歩として、本稿ではジョイスの初期作品である『ダブリンの市民』の冒頭に置かれた作品、「姉妹」の分析を行い、次稿において短編の最後を締めくくる作品、「恩寵」を考察し、その後、その二作の間に置かれた作品の分析を、内外の優れた研究に依拠しながら進めたい。

本論に入る前に先行研究について触れておかなければならない。ジョイスの作品はその表現の過激さ卑猥さなどから、当初、アイルランドでは発売されることはなかった。ジョイスと同時代に生きたイギリスの批評家、シリル・コノリー(Cyril Vernon Connolly)は、1929年４月、「作家の名声が時代によって上がったり下がったりすることは良くあることだが、ジョイスの場合は場所によって評判が

---

15 リチャード・エルマン、宮田恭子訳『ジェームズ・ジョイス伝１』みすず書房、1996年、186頁。

16 Joyce, *Selected Letters of James Joyce*, p.83.

17 Gibson, Andrew, *James Joyce*, Reaktion Books Ltd., London, 2006, pp.89-90.

18 リチャード・エルマン、宮田恭子訳『ジェームズ・ジョイス伝２』494頁。

19 Ellmann, Richard, *James Joyce*, New and Revised Edition, Oxford University Press, 1983, p.353.

20 問題４.については紙幅の都合により、次稿に於いて論述する。

高かったり低かったりする。ジョイスはアイルランドでは恨みを買い、イギリスでは無視され、アメリカでは一部の人々によって偶像扱いをされている」[21]と述べたが、ジョイス研究はアイルランドをその起点としなかった。我が国でのジョイス研究は、1918年に詩人野口米次郎が[22]小説『若い芸術家の肖像』を紹介し、その文体の特徴を指摘して以来のことである。本稿が扱うジョイスと宗教、教会批判といった視点から彼の作品を捉えようとする研究は、我が国においては管見の限り僅かである[23]。一方、海外の研究でジョイスと宗教を結びつけたものには、*Joyce among the Jesuits*[24], *Joyce and Aquinas*[25], *The Conscience of James Joyce*[26] 等が見られるが、やはりその数は少ない。

第一章　『ダブリンの市民』の構成と本稿での対象作品

『ダブリンの市民』(*Dubliners*) は、十五編からなる短編集として知られている。しかし、厳密には次に挙げた１から14までの短編、及び、15作目の中編により構成されている。

物語りは、少年期、青春期、青年期、社会生活の四期に分けられ、次のように配置されている。

<少年期> １.「姉妹」(*The Sisters*)、２.「出遭い」(*An Encounter*)、３.「アラビー」(*Araby*)、<青春期> ４.「イーヴリン」(*Eveline*)、５.「レースの後で」(*After the Race*)、６.「二人の伊達男」(*Two Gallants*)、７.「下宿屋」(*The Boarding House*)、<成年期>　８.「小さな雲」(*A Little Cloud*)、９.「対応」(*Counterparts*)、10.「土」(Clay)、11.「痛ましい事故」(*A Painful Case*)、<社会生活> 12.「蔦の日の委員会室」(*Ivy Day in the Committee Room*)、13.「母」(*A Mother*)、14.「恩寵」(*Grace*)、<付加作品> 15.「死者たち」(*The Dead*)。

本稿では以下の理由から「姉妹」及び「恩寵」[27]を考察の対象とする。ジャクソン及びマクギンレーは[28]、『ダブリンの市民』でジョイスが信仰をテーマとして著した作品には、「恩寵」及び「姉妹」があると述べている。冒頭に置かれた「姉妹」については、特にジョイスが「教会との戦争」の開始を告げる役割をこの作品に付したものと考え、考察対象とする重要性を確信する。さらに、1906年５月に弟に宛てた書状でジョイスは「この作品は読者の気分を害させずに書くことは出来ない。アイルランドの司祭は、「姉妹」を糾弾するだろう」[29]と語っており、彼の「教会批判」に沿う内容の記述がこの作品に多く現われているのではないかと考える。 一方、「恩寵」については、ジャクソン及びマク

21　丸谷才一『現代作家論　ジェイムズ・ジョイス』早川書房、1974年、51頁。

22　鏡味国彦『ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇』文化書房博文社、1983年、10頁。

23　安藤勝編『英米文学研究文献要覧』紀伊国屋書店、1994年、20世紀文献要覧体系23号。

24　Sullivan Kevin, *Joyce among the Jesuits*, Columbia University Press, 1958.

25　Noon,William, *Joyce and Aquinas*, Yale University Press, 1957.

26　O'Brien, Darcy, *The Conscience of James Joyce*, Princeton University Press, 1967.

27　「恩寵」の分析は紙幅の都合により、次稿において論述する。

28　Jackson, John. W. & McGinley, Bernard., *James Joyce's Dubliners*, Sinclair-Stevenson, 1993, p.156.

29　Joyce, *Selected Letters of James Joyce*, p.83.

ギンレーが、『ダブリンの市民』の中の作品のすべてを凝縮する最も重要な作品[30]と記しており、ジョイスの命題がより核心的に表現されているものと考える。また、「恩寵」は当初からジョイスが『ダブリンの市民』を締め括る作品として位置づけていた作品でもある[31]。

「死者たち」については、本稿での考察対象とすべきものと考えるが、次の理由により除外する。① 短編は全て1905年までに執筆されている。「死者たち」は、1907年に著されており長さの点からは中編であり、その表出態度は他の十四作とは明らかに異質なものである[32]。②『ダブリンの市民』という作品の全体的な統一という観点から「死者たち」は問題である[33]。③ ジョイスは、「『ダブリンの市民』では、私はダブリンに不当に厳しかったような気がする。この都市の魅力を何一つ再現しなかった」[34]と述べ「死者たち」の執筆にとりかかっている。④ 短編の登場人物たちは「中の下の階級」に属するが、「死者たち」の主人公はそれより上の階級、むしろブルジョア社会に属した人々にまつわる物語となっている[35]。

第二章 「姉妹」 ― 作品の紹介

第一節「姉妹」 ― 粗筋

本節では物語の粗筋を「少年と神父」、「神父の棺の前で」という二つの項目に分けて纏める[36]。

1．少年と神父

少年は伯父伯母と同居しており、日頃からキリスト教の教義やミサの方法などについてフリン神父から個人的に指導を受けている。ある日、神父が卒中で倒れてしまう。今回は三度目である。神父は「もう長くは生きられない」と語っていたが、少年は「取り留めのないことを言って」と放ってしまう。しかし、何か気になり毎晩神父の住まいの前を行き来し様子を伺った。もし亡くなっていたのなら死者の頭のところに蝋燭が二本燈る。きっと窓にその影が映るはずだ。しかし、その気配はなかった。少年は神父の部屋を見上げる時、「麻痺」という言葉をそっとつぶやいてみた。最初、その言葉はユークリッド幾何学のノーモン、『カトリック教義問答集』の「聖職売買」といった言葉と同じように奇妙に響いた。しかし、今では、何か邪悪で罪深い存在の名のように響き彼は恐れを抱いたが、その一方でそれに近寄ってみて、その忌まわしい行為を見てみたいとも思った。

ある夕方、伯父の友人のコッター爺さんが来て、神父が亡くなったことを告げる。コッター爺さん

---

30 Jackson & McGinley, p.56.

31 Norris, Margot, *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners*, University of Pennsylvania Press, 2003, p.197.

32 桶谷秀昭『ジェイムズ・ジョイス』紀伊国屋書店、1980年、124頁。

33 結城英雄『ジョイスを読む』集英社、2004年、79頁。

34 エルマン著、宮田恭子訳『ジョイス伝１』みすず書房、1996年、264頁。

35 Norris, p.216.

36 ジェイムズ・ジョイス*Dubliners*の翻訳の引用は、すべて結城英雄訳『ダブリンの市民』 岩波文庫、2008年に依る。

によると、神父にはどこか奇妙で不気味なところがあったと言う。すると伯父さんが、神父と少年は仲の良い友達だった、神父は彼にいろいろと教えてくれて目をかけてくれたと語る。それに対しコッター爺さんは、もし自分の子供だったらあんな男とは付き合わせたくない。なぜなら子供の心は感じやすく、あんなふうなものを見ると影響を受けてしまうからと語る。これに対し伯父さんは私も同じ意見だ。そこの薔薇十字会員[37]にいつも言っている。身体を鍛え、冷水浴でもして、と話をはぐらかしてしまう。夜、少年はなかなか寝つかれなかった。コッター爺さんが一体何を言おうとしているのか気になった。そこに唇を唾液で濡らし、絶えず薄ら笑いをした生気のない灰色の麻痺したような神父の幻が現れた。少年は自分の魂がどこか楽しい邪悪なところへ遠のいて行くように感じた。そして、神父の唾液で濡れた唇が、つぶやくような声で何かを告白し始める。そこで彼は神父が麻痺で亡くなっていることを思い出し、あたかもその「聖職売買」の罪を許すかのように自分も弱々しく微笑んでいることを感じた。しかし、神父の死に遭遇した少年は不思議にも悲嘆にくれることがなく、かえって、束縛から解き放たれたような開放感を覚え当惑したくらいだった。

若い頃、ローマにあるアイルランド神学校に学んだ神父は、少年にラテン語の発音方法やカタコンベやナポレオンの話、そしてミサで着る法衣の意味合いや大罪や小罪に該当する行為などについて教えてくれた。そうした話から少年は今まで最も単純だと思っていた教会の制度ですら、実は、複雑で神秘的なことであったことを知るようになる。また、告解室で漏らされる秘密に対する司祭の職任はあまりにも重大ではないかと考えた彼は、どうして司祭がそのような責務を引き受ける勇気を持てるのか不思議でならなかった。しかし、そうした込み入った問題に対応するために郵便局の人名簿のように分厚い書物があるということを神父から聞かされた彼は、特段、驚きもしなかった。また、神父は少年にミサの答辞を暗記させた。それを彼が早口に唱えると神父は、時折、嗅ぎ煙草の大きな塊を鼻孔に交互に押し込み、大きな変色した歯を見せて、舌を下唇の上にのせて笑った。少年はコッター爺さんが神父について語った言葉がまだ気になっていた。また、昨晩見たペルシャにいたような夢の結末が何であったのかを考えたが思い出せなかった。

2．神父の棺の前で

夕方、叔母さんと一緒に神父の家を訪ねた。神父の遺体は既に棺に納められており、皆で棺の下の方にひざまずいて祈りを捧げようとした。しかし、少年は神父の妹ナニーのぶつぶついう声に気持ちが乱れた。また、彼女の靴のかかとが片方だけに磨りへっていたり、スカートが背中で不恰好に止められていたりするのが気になった。棺の中の神父は祭服を着て大きな手に力なく聖杯を抱え、ひどく獰猛そうな顔をしていた。ナニーはシェリー酒の入ったデカンターとワイングラスを出し、ワインを、

---

[37] Gifford, Don, *Joyce Annotated - Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, University of California Press, 1982, p.30.：Rosicrucian - A member of an international fraternity of religious mystics, the Ancient Order Rosae Crucis. 本稿はジョイスのキリスト教会批判を論じようとするものであり、ここでは薔薇十字会については言及しない。

と勧める。彼女は姉の言いつけでシェリーを注ぎ皆に回した[38]。階下の小部屋には姉エライザが腰掛けていた。伯母が「あの方もとうとう天国に召されて」と語る。するとエライザが神父の死は息を引き取ったのも分からないほど静かできれいなものであった。終油[39]はオゥラーク神父に済ませて貰ったのだが、神父はその際にも悟りきった様子だった、などと続ける。さらに、エライザは、家は貧しかったけれど神父には不自由をさせたくないと思い、できるだけのことをした。彼は普段は全く手のかからない人であったけれども、亡くなる前から聖務日課書は床へ落としてしまうし、椅子にもたれて口を開けていたりし、様子がおかしくなっていたと語る。しかし、いつも生家を見るためにリウマチ車輪[40]の付いた馬車でアイリッシュタウンに連れて行ってくれると言っていて、皆楽しみにしていたとも言う。その一方で、神父は几帳面すぎる人だった。司祭の務めは荷が重すぎたようだし、彼の一生も思うようにいかなかったのかもしれないとも語った。すると伯母さんが、彼が失意の人だったのはよく分かると言い、エライザも彼がおかしくなったのは聖杯を壊したことがその始まりだったと続ける。しかし、聖杯の中には何も入っておらず何ともなかった。そもそもあれは、侍者の過ちだった。それにも係わらず、神父はひどく気に病み、あれからというもの誰とも口をきかずふさぎ込むようになった。ある夜、神父は人を訪問する用事があるというのに、行方が分からなくなり、皆で探すと薄暗い告解室に座って、大きく目を見開き一人忍び笑いをしていた。皆がそれを見て、これはどこかおかしいと思ったとの話が続く。

第二節「姉妹」 ― 作品のテーマ

ジョイスはダブリンを「麻痺」[41]状態にあるとし、「多くの人間が、これが都市だと考える半身不随の麻痺した魂を描くためにあの作品を『ダブリンの市民』と名づける」[42]と語った。したがって、ジョイスの『ダブリンの市民』の執筆のテーマは、ダブリンの麻痺を描くことにあったということになる。しかし、ジョイスは「姉妹」の冒頭で主人公の少年に自身のテーマである「麻痺」だけではなく、「ノーモン」や「聖職売買」という言葉を挙げさせた。そして、それを「麻痺」と同様な響きを持った言葉とした。では、なぜジョイスは「執筆の意図」を「麻痺」に限定したのだろうか。そこには何かの意図が隠されていたのだろうか。以下に、ジョイスが本作品に託した真のテーマとは一体何であったかを考察する。

---

38 Joyce James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p.5. 妹ナニーの混乱した状態が伺える。

39 ドナルド・K・マッキム『キリスト教神学用語辞典』日本キリスト教団出版局、2002年、360頁。「最後の塗油」－臨終の床にある病者のための秘蹟。

40 Joyce James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p.6. エライザは、rheumatic wheel（リウマチ車輪）と語るが、pneumatic wheels（空気式車輪）の間違いであり、ここでは姉エライザの混乱ぶりが伺われる。

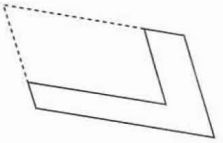
41 Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, Ellmann, Richard., ed., Faber and Faber, 1975, p.83.

42 リチャード・エルマン、宮田恭子訳『ジェームズ・ジョイス伝１』みすず書房、1996年、186頁。

1.「麻痺」、「ノーモン」、「聖職売買」

「麻痺」(paralysis) についての医学的説明[43]は、「①神経組織の損傷、または疾病による筋肉の随意運動力の喪失。②身体の一部の感覚喪失。③分泌または精神作用のような機能の喪失」とのことである。

「ノーモン」(gnomon)[44]については、「平行四辺形からその一角を含む、それに相似な平行四辺形を取り除いた残りの図形」[45]との記述がある。したがって、「ノーモン」は本来の形体からの欠如を意味し、不完全さを類推させる言葉でもある。



「聖職売買」(simony) は、トマス・アクィナスが『神学大全』第19巻第２部第100問[46]において定義をした概念である[47]。以下は、本論に即し筆者が要約したものであり、また、下線部分については筆者が強調のため付したものである。

第１条「聖職売買とは何か」ではこの世のものは全て霊的事物であり次の理由から売買するには相応しくないものとしている。①その価値は地上的な価値では計れない。②霊的事物の所有者は神であり、その保有者は単なる管理者にすぎない。③神から無償で授かったものであるから、他にも無償で与えなければならない。

第２条「秘蹟のために金銭を受け取る事は許されるか」との議論では、秘蹟[48]（洗礼、堅信、聖体、ゆるし、病者の塗油、婚姻、叙階）を執り行う権能は、神が聖職者に無償で与えたものであるから、それを施す際に金銭を受け取ってはならないとしている。しかし、秘蹟の管理者の生活を維持するために何かを受け取る事はこの限りではない。

第３条「霊的な行為のために金銭を受け取ることが許されるか」との議論では、霊的な行為とは霊的な恩寵を授けるための秘蹟であり、霊的な権能を託されている者は教会から生活の維持費を受けているため霊的な権能の対価として何かを受け取ったりした場合は罪となるとしている。また、そこに契約が介在していた場合も同様である。

43　ステッドマン編集委員会編『ステッドマン医学大辞典』メジカルビュー社、1981年、1027頁。

44　*The Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, 1987, p.245.

45　小稲義男編『新英和大辞典』研究社、1980年、895頁。

46　トマス・アクィナス著、稲垣良典訳『神学大全』第19巻第２部第100問、創文社、1991年、426-461頁。ここでは、「聖職売買」ではなく「聖物売買」と訳されている。本論では、『新カトリック大事典』に倣い「聖職売買」として考察を進める。

47　上智学院新カトリック大事典編纂委員会　『新カトリック大事典』　研究社、2002年、635頁。

48　同書、189頁。

第４条「霊的なものと結び付いた事物を売る事が許されるか」との議論では、すべて現世的なものは霊的なものに結び付けられており、それを売ることはできるとしている。しかし、霊的なものへの秩序、例えば神に係わる聖職者の立場などは売買されるべきではないとし、また、聖なる器も霊的なものに結び付けられており、売ることはできないとしている。しかし、砕かれた後の器は聖なる器ではなく単なる金属であるため売ることはできる。砕かれた器をまた同じ素材から造るには、再度、聖別される必要があるともしている。

第５条「手による贈与のみが聖職売買を成立させるか、それとも言葉および奉仕による贈与も聖職売買を成立させるか」との議論については、もし、その奉仕が不純で肉的なことへと結びつけられていたならば、それは奉仕による贈与であって聖職売買の罪になり、また、ある人が司祭職を得たいと求めるなら、そうした高慢さを抱くことからして相応しくない者となるとしている。

第６条.「聖職売買の罪について」の議論については、聖職者が与える秘蹟は霊的なものであり、神の意思に反して、いわば盗むという形でその職務を行使してはならないとしている。また、聖職売買者たちは、霊的なものを売る者も買う者も、また仲介する者も罰せられ、聖職者の場合には汚辱、免職によって、一般信徒は破門によって罰せられる。

２．ジョイスによるアクィナスの「聖職売買」の理解の根拠

ジョイスは自身の「教会への戦争」を開始するにあたり、アクィナスをその拠り所としたと考える。その根拠は次の通りである。①「アクィナスこそ、鋭い刃のような論証によった最も偉大な哲学者であり、アクィナスを一日一頁ずつラテン語で読んだ」と語っている[49]。②「アリストテレスとアクィナスの思考は、私を導いてくれるものとして必要である」と述べている[50]。③新トマス主義[51]の運動が興隆している只中にジョイスはおり、「聖職売買」の議論に触れていたと考えられる。④ジョイスが通っていた大学、ユニバーシティー・カレッジ・ダブリンが1901年11月27日に開催したThe Academy of St. Thomas Aquinasの数少ないメンバーとしてジョイスが名を連ねていた[52]。⑤自身のアクィナスに関する思考を「応用アキナス学」[53]（Applied Aquinas）と呼んでいた。

---

[49] Ellmann, Richard, *James Joyce, New and Revised Edition*, Oxford University Press, 1983, pp.341-342. ボリス・ファーラン氏（Boris Furlan）がエルマン教授に宛てた書状で語ったもの。フォーラン氏はジョイスが英語を教えた生徒の一人。後に、ユーゴスラビアの政治において顕著な役割を果たす。

[50] James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992, p.144 "I can work on at present by the light of one or two ideas of Aristotle and Aquinas. I need them only for my own use and guidance until I have done something for myself by their light."

[51] 上智学院新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』研究社、2002年、443－444頁。教皇レオ13世が1879年「アクィナスの精神」によるキリスト教的哲学の復興を呼びかけ始まった論議。

[52] Sullivan, Kevin, *Joyce among the Jesuits*, Greenwood Press, 1958, pp.167-168.

[53] ジェイムズ・ジョイス著、丸谷才一訳『若い芸術家の肖像』集英社、2009年、383頁。

一方、ジャクソン及びマクギンレーの研究[54]では、ジョイスは「聖職売買」を次の項目に分けて理解していたという。①聖霊の住処である人体が売春を行うこと。② 愛情を金銭または地位で取引すること。③友情を裏切ること、またはそれを売買すること。④貧民を搾取すること。⑤孤独・惨めさを味わうこと。⑥政治原則における背信行為を行うこと。⑦職権を濫用すること。⑧縁故主義などあらゆる形態での悪事の仲介をすること。⑨偽善行為を行うこと。

第三章 「姉妹」— ストーリーの分析

1．ジョイスの思惑

前節から少年が冒頭に発した、「麻痺」、「ノーモン」、「聖職売買」の三つ言葉の内、「麻痺」、「ノーモン」は、何れも「機能不全」や「不完全」を示し、「聖職売買」という言葉だけが、宗教に関連する言葉であることが判明した。したがって、ジョイスの「書くこと、語ること、行うことにより公然と教会に戦争を挑む」という表明に従えば、この言葉の内でジョイスの命題に沿う言葉は「聖職売買」のみとなる。中間に位置する「ノーモン」については、少年は一度触れただけであり、それ以外の使用は見られない。このことから、ジョイスが「ノーモン」という言葉に付した役割は軽微なものと推察する。仮に少年が「麻痺」、「聖職売買」という二つの言葉だけをつぶやいた場合を想定するとあまりにも暗く陰鬱な印象が創出されるのではないか。このため、ジョイスは「麻痺」と「聖職売買」との間に何か緩衝材的な役割を持った言葉を置くことを考え、同じく「奇妙に響く言葉」を探したところ、以前、学習したユークリッド幾何学の「ノーモン」を想起したのではないだろうか。実は、ジョイスは数学を不得手としていた[55]。それはジョイスが11歳の時より通学していたベルベディア・カレッジでの成績にも如実に表れており、ユークリッド幾何学での彼の成績を見ると、600点満点中40点[56]に留まっていた。この成績でジョイス少年が「ユークリッド幾何学」を理解していたかは、はなはだ疑問であり、ジョイスにとって「ノーモン」という言葉は、まさに奇妙で意味を成さない言葉であったのではないか。このことから、ジョイスはこの言葉に奇妙さ・不完全さだけを演出させる役割を付したものと推察する。

以上から『ダブリンの市民』におけるジョイスの思惑は、登場人物たちの「麻痺」を描き、その「聖職売買」の罪を暴くことにあり、その検証方法として「邪悪で罪深い存在による様々な悪行を見る」ということにあったものと考える。このため、本稿では以上の仮説に沿って登場人物たちの「麻痺」を確認し、それがどのように「聖職売買」の罪に関連付けられているかを考察する。なお、分析にあ

---

54 Jackson, John W. & McGinley, Bernard, *James Joyce's Dubliners*, Sinclair-Stevenson, 1993, p.11. ジャクソン及びマクギンレイが述べる「ジョイスが意味するシモニー」については典拠が示されていないが、彼らの文献はケンブリッ大学等に採用されており権威のあるものと推察する。

55 桶谷秀昭『ジェイムズ・ジョイス』紀伊国屋書店、1980年、192頁。

56 Sullivan, Kevin, *Joyce among the Jesuits*, Columbia University Press, 1958, p.104

たっては、ダブリンの麻痺から逃れ、芸術家として飛翔を試みようとする青年の意識の成長を描いたジョイスの自伝的小説とされる『若い芸術家の肖像』を、適宜、引用する。

2．神父の経歴に見る「麻痺」と「聖職売買」

フリン神父はアイリッシュ・タウン[57]の出身である。この地域はダブリンの巨大スラムとして知られ、犯罪が多発し生活環境も極悪とされ極めて殺伐とした地域である[58]。したがって、多くのダブリン市民にとっては排他的な地域であり、おそらく、そこの住人は他のダブリン市民から差別的な扱いを受けていたものと推察する。そのような環境に育ったにもかかわらず、神父は取り分けて優秀であった。神父は姉妹の献身的な援助を受けながら、やがて多くの司祭たちが憬れ極僅かなエリートのみが入学を許される、ローマにあるアイルランド神学校[59]で学ぶという華々しい出世コースを歩むようになる。過去の修了者の中には、アイルランドの教会組織で司教や大司教といった要職に就く人たちが多く見られた[60]。将来を嘱望された神父はひたすら勉学に励んだ。彼は、当然、経済的にも社会的にも恵まれ、教会組織の中で自らの影響を行使し得るような職責を期待していたであろう。しかし、神父の夢はあえなく頓挫し、彼は極貧の人々の住むダブリン市、ミース通りの聖キャサリン教会[61]の司祭の地位に甘んじた。通常、司祭の地位にある人物には教会敷地内の施設を宿舎として提供される場合が多いが、神父にはそうした施設はあてがわれなかったようである。結果、彼は極貧の中でもさらに極貧を極めた人々の住むグレート・ブリテン・ストリート[62]にある布地類を取り扱う店の二階を住まいとした。しかし、その店が扱う品は子供や女物の靴くらいで、普段は傘の張り替えをなりわいとしていた。おそらく二人の姉妹が生活の糧を得る為に細々とこの店を営んでいたのであろう。このように彼の生活はエリート司祭のものとは思えぬほど精彩に欠け、悲哀すら感じさせるものであった。

しかし、なぜ神父はエリート・コースから逸脱してしまったのか。また、どのような経緯から周囲に奇妙で薄気味悪く、変っていて失意にまみれた人といった評を醸成してしまったのであろうか。おそらく、その主な原因はフリン神父の「出身地」にあったのではないだろうか。仮に、フリン神父が極貧の人々が住む排他的な街アイリッシュタウンの出身ということが教会内で認知されていたとしたら、それが彼の昇進に有利に働いたとは考えにくい。かえって、その出身が彼を他の幹部候補生たち

---

57 Gifford, Don, *Joyce Annotated - Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, University of California Press, 1982, p.34.

58 アイリッシュタウンについては、近年になって市が新たなアパートなどの建設を進め常に改善の努力はしているものの、治安は現在も極悪とのことである。（情報源：アイルランド政府P. Sheridan、2011.6.3）

59 Gifford, p.31: The Irish College in Rome: The plan for an Irish seminary in Rome was first conceived by Gregory XIII, but the money allocated for the college went instead to supply Irish Catholics for a revolt against the English. It opened in 1628. Before Napoleon closed it in 1978, there had been only eight students a year.

60 *Ibid*., p.31.

61 *Ibid*., p.31.

62 *Ibid*., p.31. The area where some of the poorest of Dublin's poor lived.

とは異質な存在とし、組織から徐々に排斥されるような傾向を加速させていったのではないか。神父はこの世の無常を感じていたのかも知れない。しかし、そうした状況にあっても、彼は物事を頑なまでに几帳面にはかどらせようとした。窮乏に苦しむ人々にキリストの教えを説き、その告白を聞き、大罪・小罪は何かを考え、聖餐式の準備をし、と多忙な毎日を送っていた。だが総じて、彼にはその任が重すぎたのである[63]。そして、ある日、侍者が聖杯を壊したことをきっかけに、神父は精神作用の機能喪失に陥り告解室で一人忍び笑いをする姿で発見されるのである。

ここで、「聖職売買の罪」に強く関連付けられる「聖杯を壊す」という行為について考察したい。姉エライザは、「あのひとが壊したあの聖杯……あれが事の始まりで。何でもなかったそうですが。つまり、何も入っていなかったそうなのです。侍者の男の子の間違いだったそうですが、それでも、かわいそうにジェイムズはとても気に病んで」というふうに語るが、「あの人が壊したあの聖杯」について、アクィナスは上述の「聖職売買」の議論、第４条において、「聖なる器もまた霊的なものである……砕かれた後の聖杯は聖なる器とは見做されず、単なる金属に過ぎない」としている。すなわち、アクィナスは聖杯を壊すという行為については、その破壊時期、いわゆる、それが聖別される前か後かを問題としているのである。さらに、『新カトリック大事典』では、「ユカリスティアの典礼（ミサ）においてキリストの定めた言葉を唱えることにより、初めてパンとぶどう酒がキリストの体と血となる」[64]と記している。姉エライザは、「聖杯には何も入っていなかった」と明言をしている。すなわち、その聖杯にはぶどう酒は入っておらず、聖体の存在はなかったのである。これをアクィナスの条件に照らせば、その聖杯は聖別される前、あるいはミサの終了後、聖別が解かれた後の段階のものであって、単なる素材でしかなかったということになる。したがって、侍者、あるいは神父は、「聖職売買の罪」に何ら抵触するものではない。また、聖杯を手にしていた神父を侍者が過って押すなどして神父がそれを床に落とし、聖杯を破損した場合、あるいは、侍者が持っていた聖杯を過って落下させ損傷し、神父が監督責任を痛切に感じていた場合などを想定したとしても、その想定自体が不毛である。なぜなら、この聖杯にはそもそも聖体が入っておらず、聖別がなされていないのであるから。一方、アクィナスは、第４条で「聖杯は霊的事物であり、それは教会に属する物であり、神からの預かり物」であるとしている。このことから、侍者あるいは神父には、教会に属する聖杯を破損した罪が問われる可能性も考えられる。しかし、アクィナスはその論理展開に於いて「緊急事態」を想定し一定の寛容性を設けている。その例として「洗礼」を挙げると、「緊急必要な場合には、誰でも洗礼を授けることが出来る。子供のために配慮すべき人間がいるのであれば司祭でなくても良い。水も元はといえば単なる物体的な元素に過ぎないのだから」などと論じているのである[65]。したがって、ア

---

[63] ジェイムズ・ジョイス著、結城英雄訳『ダブリンの市民』岩波文庫、2008年、25頁。
James Joyce, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993, p.6.

[64] 上智学院新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』研究社、2002年、752頁。

[65] トマス・アクィナス著、稲垣良典訳『神学大全』第２部第19巻第100問、創文社、1991年、436頁。

クィナスの論理に依ると、神父、あるいは侍者が聖杯を故意には基づかず、過って壊すという行為に至ったことについては、何ら罪に問われるものではない、とするのではないだろうか。したがって、聖杯を壊したことをきっかけにして神父がその精神を病んでいったとする姉エライザの語りは妥当性を欠く。

一方、少年は作品の冒頭で、『カトリック教義問答集』の中の「聖職売買」について触れているが、次に、この観点から神父の罪を考察してみたい。ギフォード教授の調査によると、アイルランドの『カトリック教義問答集』には「聖職売買」についての記述はないとのことである[66]。もし、そうであるなら、神父は『カトリック教義問答集』の中の「聖職売買」の罪の理解を持ち合わせていなかったということが想定し得る。そのため、聖杯が壊れたことに狼狽した神父はそれを気に病み精神の破綻をきたしていったとのシナリオも考えられる。しかし、この点について神父が把握していなかったと想定することは次の点から適切ではない。① 神父は司教や大司教たちを養成するローマの神学校への留学を果たしており、『神学大全』第二部「修道者と修道生活」の中の「聖職売買の罪」の条項は聖職者の基本的心得として初期の段階で学んでいたはずである。② 当時、アイルランドにおいても新トマス主義が活発に論議されていた。この只中にあった神父が教会内部での「聖職売買の罪」の論議に触れる機会がなかったとは考えにくい。とすると、姉エライザの「聖杯事件がきっかけとなり、あれが事の始まりで彼がおかしくなった」という語りは、この点からも合理性を欠く。

では、姉エライザが神父の精神の異常を聖杯事件に関連付けた理由は何か。この問題を考察するにあたり、批評家シルル・コノリーの「アイルランドでは一般の大衆は偏狭であり、司祭の言うことならよく聞いてしまう。[67]」という見解、そして、ダブリンの人々がよく口にする、“Everybody knows everybody”（みんなが知り合い）という言葉を記しておきたい。コッター爺さんは、「あんな男と自分の子供は付き合わせたくない」と語っているが、彼がこうした意見を形成するまでには神父についての相当な悪評の蓄積があったことと推察する。そもそも神父の精神の異常さは、神父が昇ろうとしたエリートへの階段が消滅した時から、徐々に周囲の目にも明らかになっていったのではないかと考えるが、「みんなが知り合い」の小さな社会で貧困に喘ぎ細々と生きる「偏狭な市民」にとって司祭にまつわる「不気味さや奇妙さ」といった話題は、ことさらおかしく、針小棒大に言いふらされていたのかも知れない。神父と共に暮らす姉妹もこうした噂を当然耳にしており、二人は相当困惑していたのではないか。そこに神父の聖杯損傷事件が勃発する。神父の家には何かと来訪者が多いことと推測するが、そうした信者に対応する必要のあった姉妹にとって、「侍者が過って聖杯を壊し、神父がその責任を痛切に感じ、ついに精神に変調を来たした」と説明することが、当面、最善の方法であったのではないか。

---

[66] Gifford, Don., *Joyce Annotated - Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, University of California Press, 1982, p.29.

[67] 丸谷才一『現代作家論　ジェイムズ・ジョイス』早川書房、1974年、51頁。

3．少年に見る「麻痺」と「聖職売買」

そんな神父の楽しみは、少年にキリスト教会の儀式や教義について指導をすることでもあった。伯父さんはその二人の姿を「仲良し」と称した。しかし、その評は少年の真意を映したものではなかった。というのは、神父が少年に「もう長くはない」と訴えても、彼は「また取り留めのないことを言って」と放ってしまうのである。やがて、少年は神父の訃報を聞くことになるが、なぜか彼には悲嘆の感情すら沸かない。それどころか、その死によって束縛を解かれたような開放感を覚えるのである。一方、少年は神父の幻を見るが、その顔は唇を唾液で濡らし絶えず薄ら笑いをし、少年につぶやくような声で何かを告白している。少年はどのような内容の告白を聞いたのであろうか、あたかもその聖職売買の罪を赦そうとでもするかのように自らも薄ら笑いを浮かべるのである。

ここで、聖職者ではない少年が聖職者である神父の罪を赦そうとした行為が、アクィナスの論じる「聖職売買」の罪に抵触するのではないかという疑問について考察したい。

アクィナスは「聖職売買」の議論、第５条において「ある人が司祭職を得たいと求めるなら、そうした高慢さを抱くことからしてそれに相応しくない者である」としている。また、第６条では「聖職者が与える秘蹟（「告白」を含む）は霊的なものであり、神の意思に反して、いわば盗むという形でその職務を行使してはならない」ともしている。ならば、聖職にない少年が神父の告白を聞き、「聖職売買」の罪を赦そうとする行為は、そうした考えを抱くだけでも高慢極まりないということになるのではないか。また、少年は資格もなく司祭の告白を聞きその「聖職売買」の罪を赦そうとしていたことになるのであり、こうした罪を犯す者は、一般信徒であれば破門ということであり、幻の世界のことではあったが、少年はあやうく重大な「聖職売買」の罪を犯し、破門の危機を迎えようとしていたことになる。

では、少年が神父に抱いていた侮蔑ともみられる感情は、一体何に由来していたものなのだろうか。また、少年が赦した神父の聖職売買の罪の対象はいかなるものであったのだろうか。ジョイスは『若い芸術家の肖像』の中で、イエズス会士について主人公のスティーヴンに次のように語らせている。「彼らはこの世の策略、学識、狡智を命ぜるままに、神のより偉大なる栄光のために用い、それをあやつることに喜びを感じるわけでもなく、といって、そうすることの中に含まれている悪に対して憎悪を感じもせず、ただひたすら服従の身振りでそれらを繰り返しているようだ」[68]。一方、この作品に登場する少年は、教会の制度は「最も単純なもの」との認識を持っていた。しかし、神父はそれを「極めて複雑で神秘的なもの」とし、少年の認識とは対極的な説明をした。さらに、告解に対応するために郵便局の台帳のように分厚い手引書を司祭たちが作成しており、それに基づいて様々な人々の告解に対応している、と聞かされた少年は、特段、驚きを見せない。以上から、少年の神父に

---

[68] ジェイムズ・ジョイス著、丸谷才一訳『若い芸術家の肖像』2009年、339頁。Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 2001, p.143.

対する軽侮の念は、キリスト教会一般に対するものに由来したものと考える。したがって、ジョイスが『若い芸術家の肖像』の中で青年に語らせた聖職者への批判と、この「姉妹」の少年の感情とが一致し、ここにもジョイスの教会批判が展開されていることが伺われる。

4．少年、及び、その他の登場人物が頻用した、*it*、*that* の原意

また、少年の語りでもう一点検討すべき課題がある。それは、少年は神父に教えを請うていたにも係わらず、神父に対する尊敬心をまったく示していない点である。それは、少年が神父を終始、「あの人」*it*〔それ〕、*that*〔あれ〕と呼んでいることからも明らかである。これは彼を取り囲む人々にも共通している。したがって、この*it*、*that*がどのような意味を持つものかを以下に確認したい。

特に重要と思われる*it*の使用は、少年が神父の幻影を見た時、「それはつぶやくような声で告白をし始めたが、なぜそれがいつも微笑んでいるのか、なぜその唇が唾液でそんなにも湿っているのか不思議に思った」(15頁)[69]という箇所に見られる。コッター爺さんの証言もいくつか挙げてみよう。「あれ（*it*）は、例の・・・異な症状の一つで」(12頁)、「自分の子供には、あんな男（*a man like that.*）とあまりつき合わせたくない。」(13頁)、「子供によくないのは・・・あんなふうなものを見ると（see *things like that*)、ある種の影響を受ける。」(14頁)、また、伯母さんは、「あれのことでしたの（was *that it?*)、何か聞いておりましたけど・・・」と語る。そして、姉エライザが、「あれ（*That*）が彼の心に影響をして・・」と語り、また、作品の最後に、「みなさんがそれをご覧になって（when they saw *that*)、どこかおかしいとお思いになって」(26頁）などと語る箇所である。

この *it* の原意は、代名詞的用法だけでなく「性的なこと」[70]に関連した名詞的用法があると示されている。このように、語学的見地から見ても、また、神父を取り巻く人々の証言から推測しても、「それ」、「あれ」、が性的事象に関連付けられた言葉であったことが強く伺われ、少年が神父を赦そうとした「聖職売買」の罪は、性的なことに関連していたと推測する。

なお、アイルランドにおける聖職者による児童虐待については、長年疑われてきたことであるが、1975年から2004年の間に数千人に対し性的虐待や暴行が繰り返されていたとして、ローマ法王ベネディクト16世が、ローマ法王庁として公式に謝罪し（2010年３月20日)、司教４人が引責辞任をしている[71]。これ以前にもこうした問題が存在したことは充分想定され、ジョイスが「姉妹」においてこの問題について言及したとも考えられ、ここにもジョイスの教会批判の一端が垣間見られる。

69　邦訳はすべて結城英雄訳『ダブリンの市民』岩波文庫、2008年を引用した。

70　*The New Shorter Oxford English Dictionary*, Clarendon Press, 1993, p.1429.
小稲義男編『研究社新英和大辞典』研究社、1987年、1123頁。名詞《俗》セックス。
中島文雄編『岩波英和大辞典』岩波書店1997年、915～916頁。名詞：性的魅力。

71　http:uk.news.yahoo.com（検索日：2010年３月20日）

5.「姉妹」(*The Sisters*) の題名の奇妙さと神父の罪

神父の奇妙さを伺わせるもう一つの手がかりとして、作品の題名がある。「姉妹」の主人公は、神父の「聖職売買」の罪の告発者である少年、あるいは、被告発者である神父であって、物語はこの二人を軸に展開していく。しかし、この作品には「姉妹」(*The Sisters*) との題名が付されている。その理由を"Sister"の原意と照合した結果、"Sister"には単に「姉」や「妹」といった意味だけではなく、「男性の同性愛者」などの意味が存在することが判明した (A fellow homosexual; a male homosexual esp. one who is a friend rather than a lover.)[72]。また、Among homosexual males, one pal or fellow[73] との意味も見られた。ジョイスは自らの自伝的小説とされる『若い芸術家の肖像』の元となった原稿を纏め出版された『スティーブン・ヒーロー』(*Stephen Hero*)[74]の中で、「時間を決めて語源辞典や類語辞典を読んでいる」[75]と語っているが、言語の多義性を熟知したジョイスが、この作品に於いてもそうした知識を発揮したものと推察する。したがって、"Sister"が持つ「性的な意味合い」の観点からも、少年が赦そうとした神父の罪は、少年に対する性的な関心に由来したものであったと推測する。また、その罪は神父の聖職者という立場を考えると、ジョイスが意味するところの「聖職売買」の罪の一つ、広義の「偽善行為」に相当すると考える。

第四章　結論

今回の考察から、次のような結論を得た。

1．ジョイスは、『ダブリンの市民』の冒頭に「姉妹」を置き、そこでダブリンの麻痺を描くことを目論んだ。彼はまず、少年に「麻痺」、「ノーモン」、「聖職売買」の三つの鍵となる言葉を語らせたが、これらの言葉の内、「聖職売買」だけが宗教に関連する言葉であった。ジョイスは少年に立て続けに「その言葉は邪悪で罪深い存在の名のように聞こえるが、それが行う忌まわしい行為を見てみたい」と語らせた。すなわち、ジョイスはこの作品に於いてダブリンにおける「聖職売買」の罪の検証を行う、と宣言したに他ならなかった。

2．「聖職売買」の対象についてであるが、ジョイスは『ダブリンには「麻痺」が蔓延している』と述べた。その一方で『ダブリンを「人」と見做した』と語った[76]。ならば、そこの住民すべてが「麻痺」に犯されていたことになる。また、ジョイスは「麻痺」と「聖職売買」を同義であるとした。それならば、ダブリンの市民もまた、「聖職売買の罪」を犯していたことになり、その罪の検証の対象

---

72 Ayto John, *The Oxford Dictionary of Modern Slang*, Oxford University Press, 1992.

73 Spears, Richard, *Slang and Euphemism - A Dictionary of Oaths, Curses, Insults, Sexual Slang and Metaphor, Racial Slurs, Drug Talk, Homosexual, Lingo and Related Matters*, Jonathan David Publishers, Inc., 1981, p.355.

74 Fargnoli, Nicholas & Gillespie, Michael, *James Joyce A To Z*, Facts on File, Inc., 1995, p.208. ジョイスの死後、1963年に出版されたもの。

75 Joyce, James, *Stephen Hero*, ed., Spencer Theodore, Jonathan Cape, 1975, p.32.

76 Ellmann, Richard, *James Joyce*, Oxford University Press, 1983, p.208.

はすべての相のダブリン市民ということになる。ジョイスは、『ダブリンの市民』を少年期、青春期、青年期、社会生活との四相に分けたが、その所以がここに見られると考える。

3.「聖職売買の罪」の元凶であるが、当時、ダブリンには二つの「支配」が存在した。一方はイギリスによる経済的支配であり、もう一方は教会によるそれである。ジョイスは教会組織に対して憎悪の念を抱いていた。そして、彼の命題は「教会への戦争」にあった。このため、彼にとって「聖職売買」の罪の元凶は、教会組織にあったということになる。

4. ジョイスは『ダブリンの市民』の出版の意図を「ダブリンに蔓延る麻痺を描くこと」と語った。それは、当時、ダブリンの人口の九割をカトリック教徒が占めており、教会と市民は支配・服従の関係にあった。その中でジョイスが、「私の『ダブリンの市民』の執筆の意図は、ダブリンに蔓延る聖職売買を描くことである」と公然と語る事はおよそ不可能であったに違いない。したがって、ジョイスは『ダブリンの市民』の出版の意図を「ダブリンに蔓延る麻痺を描くこと」と語らずを得なかったのである。

作品の分析を終え、改めてジョイスの命題を考えると、ジョイスは果たしてそれを読者に明快に示すことが出来たのであろうかとの疑問が残る。なぜなら、ジョイスは物語で「聖職売買」を断罪しようと試みてはいるものの、「教会批判」の観点からはどこか焦点に曖昧性が目立つように感じられるからである。ジョイスはその先棒として教会内部の人物である一人の神父を登場させた。その神父については、一般市民である少年への異常性を示した点などから、加害者としての描写がなされたが、その一方で、神父は教会に排斥された被害者ともなっている。すなわち、教会を代表する一人物が、加害者・被害者の両面性を持ち合わせていたことになり、これが論点に不安定さを生じさせる原因となったのではないか。本来、批判をするからにはその対象が批判に足り得る充分な根拠を持ち合わせていなければならない。例えば、神父がエリート階級の出身で、鼻持ちならず、職権を濫用し、人々への偽善行為、悪事の仲介、搾取行為など様々な聖職売買の罪を働いたというようなシナリオであったならば、ジョイスの命題はより明快になったであろう。

他方、文学的観点からみると、別の結論が導かれる。「教会批判」を目指したジョイスは「姉妹」という作品にいわゆる「告発の書」としての位置付けをし、この作品を通じて、堕落、醜悪といった神父の形象を造り上げた。そして、それに対する少年の無関心、姉妹の困惑あるいは憔悴を描く一方で、本来、信徒を導くはずの教会組織の内部にも腐敗が存在したことを明らかにした。その上で、ジョイスは神父という一人の人間の加害者としての側面、また、教会組織内で排斥されていく被害者としての側面という両面性を見事に描ききった。この点から、「姉妹」は文学作品として一定の成果を上げているものと考える。

引用文献

書誌

安藤勝編『英米文学研究文献要覧』紀伊国屋書店、1994年～2005年、全５巻。

Staley, Thomas, *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce*, Harvester Wheatsheaf, 1989.

ジョイスのテキスト、史料等

Joyce, James, *Selected Letters of James Joyce*, ed., Ellmann, Richard, Faber and Faber, 1975.

Joyce, James, *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Wordsworth Classics, 1992.

Joyce, James, *Dubliners*, Wordsworth Classics, 1993.

Joyce, James, *Stephen Hero*, ed., Spencer Theodore, Jonathan Cape, 1975.

Joyce, Stanislaus, *My Brother's Keeper*, ed., Ellmann, Richard, Da Capo Press, 1958.

ジェイムズ・ジョイス著、結城英雄訳『ダブリンの市民』 岩波文庫、2008年。

ジェイムズ・ジョイス著、丸谷才一訳『若い芸術家の肖像』 集英社、2009年。

研究書

Aquinas, Thomas, *Summa Theologica,http://www.sacred-texts.com/chr/Aquinas/summa/index.htm*

Ayto, John & Simpson, John, *The Oxford Dictionary of Modern Slang*, Oxford University Press, 1992.

Ellmann, Richard, *James Joyce, New and Revised Edition*, Oxford University Press, 1983.

Fargnoli, Nicholas & Gillespie, Michael, *James Joyce A To Z*, Facts on File, Inc., 1995.

Gibson, Andrew, *James Joyce*, Reaktion Books Ltd., 2006.

Gifford, Don, *Joyce Annotated – Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, University of California Press, 1982.

Jackson, John W. & McGinley, Bernard, *James Joyce's Dubliners*, Sinclair-Stevenson, 1993.

Norris, Margot, *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners*, Univ. of Pennsylvania Press, 2003.

Spears, Richard, A., *Slang and Euphemism*, Jonathan David Publishers, Inc., 1981.

Sullivan, Kevin, *Joyce among the Jesuits*, Greenwood Press, 1958.

The New Shorter Oxford English Dictionary Vol. 1, Clarendon Press, Oxford, 1993.

The Oxford English Dictionary, Oxford University Press, 1987.

桶谷秀昭『ジェイムズ・ジョイス』紀伊国屋書店、1980年。

小稲義男編『研究社新英和大辞典』研究社、1987年。

上智学院新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』研究社、2002年。

ステッドマン編集委員会編『ステッドマン医学大辞典』メジカルビュー社、1981年。

ドナルド・K・マッキム『キリスト教神学用語辞典』日本キリスト教団出版局、2002年。

トマス・アクィナス著、稲垣良典訳『神学大全』第２部第19巻第100問、創文社、1991年。

中島文雄編『岩波英和大辞典』岩波書店、1997年。

新村出編『広辞苑』岩波書店、1998年。

丸谷才一『現代作家論　ジェイムズ・ジョイス』早川書房、1974年。

結城英雄『ジョイスを読む』集英社、2004年。

リチャード・エルマン、宮田恭子訳『ジェイムズ・ジョイス伝１』みすず書房、1996年。